



日口交流

発行：特定非営利活動法人 日口交流協会

E-mail:nichiro@nichiro.org

Home Page <http://www.nichiro.org>

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14 麻布台マンション401号

Tel:03(5563)0626 Fax:03(5563)0752

☆留学生便り(40)☆

イルクーツクに魅了されて

増田 壮哲

私が初めての外国へ飛び立ったのは今年の2月のことでした。ロシアのウラジオストク空港から入国し、ハバロフスク空港経由でイルクーツクに到着したのも金曜日が終わる深夜でした。一番冷え込む時期に春休みを利用して短期留学をしました。

最初は英語で大学の手続きを行ったのですが、スーパーやバスではロシア語ばかり。何を質問しているのかは分かりませんし、私のロシア語の先生もロシア語しか話せない先生で会話に苦労しました。今でも、何が言いたかったのかはよく分からなかったのが帰国後の悔しさです。

皆さんは、どれくらいロシア語をご存知でしょうか。私は、独学を含めても5年目になるのに、まったく話せません。こんな調子で「将来ロシア語を使って何かをしたい」といつも夢見ています。イルクーツクにいた留学生さんはほとんどが中国と韓国からの生徒でしたが、先生の質問には懸命に答えようとしている姿が輝いていました。とても狭い教室で日当たりが強く眩しい5階での授業は辛いものでしたが、お昼の学食は私にとって極楽でした。なぜならば、ほとんど変わらないメニューしかないので、フォークとナイフで食べる食事は豪華に見えたからです。さらに、食堂のおばちゃんたちはいつも優しく接して来てくれて、言葉の壁さえ忘れかけてくれました。



バイカル湖につながる
凍ったアンガラ川からの町並み

次に友達です。友達はあまりできませんでしたが、韓国の方とは交流があって、色々と助けてもらいました。ショッピングモールやスケートにも連れて行ってもらいました。気付いた頃には、韓国の方とだけ話す日が多くなってきたほどでした。ただ、日本人が数えられるほどの人数とあって、日本人同士で集まる食事会も数回程参加しました。

日本よりもイベントが多かったイルクーツクでの思い出は私のロシア語人生の第一歩になったのでしょう。帰国する当日の晩に韓国人留学生の皆さんを見送りに集まって来てくれました。「延滞したかったけど、日本でやることがある」と思いながらまた深夜の空港へ向かいました。

本当に今でもロシア語の学習不足に不安だらけですが、また次回、ロシアでたくさんのフレーズを使って冒険したいと思います。多くのトラブルに遭いましたが、それは誰にでもあることです。帰国後にロシアの方が“Troubles make us stronger!”と語っていました。正しい英語かどうかは分かりませんが、このフレーズは私の励みです。ロシアで遭遇したトラブルは恵まれたトラブルだったのかもしれませんね。またいつか楽しいお便りをここに載せられたらと思います。

お知らせ

●第45回 憇話会のお知らせ

『ロシアにおけるCool Japan—ロシアの若者から見る日本』
ロシアの若者を魅了するCool Japanとは?ロシアの若者文化に精通する西田裕希氏の講演です。

日時 10月28日(土) 2:00~4:00 (開場1:30)

会場 東京YWCA会館217室

交通 JR御茶ノ水駅/東京メトロ丸の内線御茶ノ水駅/
千代田線新御茶ノ水駅から徒歩4~5分

会費 会員学生1200円 一般学生1500円 会員2500円
一般3000円

申込 会員/一般/学生の別・氏名・電話・E-mail等明記の上、E-mail/FAX/郵便等で協会事務局までお申し込みください。満員になり次第締め切りとさせていただきます。

Tel:03-5536-0626 Fax:03-5563-0752

E-Mail:nichiro@nichiro.org

*懇話会スタッフ募集:川島までご連絡ください。

Tel:080-4325-9981 または simatac@kzh.biglobe.ne.jp

●第45回マトリョーシカ絵付け教室

日時:2017年10月1日(日) 13:00~16:00

講師:菅野エレーナ

場所:田町駅みなとパーク芝浦、「リープラ」造形表現室

会費:3,000円(5個セットの教材、講師代、お茶代含む)

*2回目以降の参加で教材をお持ちの方は2,000円です。

お問い合わせ、お申し込みは協会事務局まで

Tel:03-5563-0626 nichiro@nichiro.org

●マトリョーシカ、手描き友禅、折り紙作品展示会

日時:2017年11月20日(月)~22日(水)

場所:神保町駅書泉グランデ7階

*マトリョーシカ、友禅の実演及び体験コーナーもあります。

●ロシア語クラス生徒募集中

少人数制ロシア語検定クラス募集!(日時相談)

平日クラス月4回¥5500×3ヶ月前納。見学できます。

0からのロシア語(水) 18:00-19:30

初級会話1(月) 19:30-21:00、初級会話2(月) 17:00-18:00

準中級会話(月) 18:00-19:30、中級会話(火) 18:30-20:00

旧満州で生き別れの親子、47年の歳月を経て対面、その後

沖大夫

昨年の日本文化交流団でエカテリンブルグを訪問の際に、戦争中日本人と結婚して生き別れたロシア人女性のドキュメンタリーを映画化したものに日本語字幕をつけたいのでボランティアで翻訳して欲しいとメンバーが依頼された。その後、ロシア語学習者を中心に台本を翻訳開始。今年になって当事者の孫で、映画を製作し主人公を演じたオリガ・ボリソワさんからこの9月に日本の祖父の墓参りをしたいので、菩提寺を見つけてほしいという要望が寄せられた。

オリガさんの祖父・石橋正美さんは戦時中、旧満洲の南満洲鉄道（通称・満鉄）に職を得て、そこでリーディヤ・ボリソワさんと結婚し、満里子さん（ロシア名・マリーナ）・正輝さん（ニキータ）の一男一女をもうけた。しかしながら、戦況が激しくなり、1945年に父と母子は離れ離れになってしまった。92年、読売新聞の通信員の方の協力で、父（80）が見つかり、満里子さんは息子のキリル君を連れて47年ぶりに大牟田市で再開が叶ったという歴史の一齣があったようであった。オリガさんは正輝さんの娘にあたる。

読売新聞と大牟田市という手がかりをたぐって、石橋さんのことを調べていくと、同紙地方面でかなり詳しい報道がなされていることがわかった。以下、ところどころ紙面の記事を紹介したい。

92年、福岡市の病院で難病の手術を受けるために来日したドミートリイ君（2つ）の橋渡しをしたクルガン市の医師リー・ゲオルギー（日本名・増田幸一）さんを介して満里子さんの「父を探してほしい」という手紙が読売新聞の記者に託された。「母は度々、福岡県大牟田市と言っていたことをかすかに覚えています」ということから同市広報相談課の協力で捜したところ、石橋正美さんが該当者と判明した。正美さんによれば、46年4月（記事によっては45年6月とも）、新京（長春）の駅頭での別れが最後となったという。合流予定であった鉄橋が爆破され、交通が遮断されてしまったのであった。やむなく引き揚げ、48年、同じ境遇の妻アツ子さん



石橋正美さん（オリガさん提供）

と再婚、一男一女をもうけ、大牟田で雑貨店や炭鉱、運送会社に職を得、70歳まで仕事を続けていた。

再会までもに糸余曲折があった。幸い、籍が残っていたこともあり、国費負担で一時帰国が可能かどうか検討され、厚生省より権太からの一時帰国者に対する援護措置の準用が決定される。これを受け、市の有志による「石橋姉弟を迎える会」準備会が発足し、市長や読売新聞の協力も得て、キリルさんら同行者の旅費や滞在費等を募金で工面することができたのであった。満里子さんが手紙を託してから5ヶ月後の7月初めに招待状が出された。正輝さんは国情や生活上の問題があって、来日できなかつたという。

ウラル山脈の近くに位置するクルガン市からはるばる五千キロの距離を経て、父娘は8月11日に再会を果たした。思い出の写真を見ながら当時の思い出を語り合い、満里子さんは「暗い時代は終わり、これからは明るい時代を生きます」と笑顔で語ったという。「迎える会」の世話で、ひと月ほどの日本の生活を謳歌し、9月8日に帰国の途に就いた。このニュースが報道されると、各地の自治体から同様なケースの相談が寄せられたり、思わぬ消息がもたらされるなど大きな収穫があった。

以後、満里子さんや医師リーさんを中心に、2年間にわたり、クルガン市と大牟田市の文化交流が続けられることになる。

2017年戸田港祭り

内堀 學

7月22日（土）戸田で開催された恒例の戸田港祭りに当協会より朝妻副会長及び弊職が参加し、水口戸田日露交流協会理事長（当協会常任理事）にプチャーチン行列、宝泉寺ロシア水兵慰靈祭、塩衣式、懇親会など現地での受け入れのアレンジをして頂いた。

ロシア大使館からザルボ武官ご夫妻、ロシア通商代表部よりシェベレク顧問他5名が参加し宝泉寺でザルボ武官が、塩衣式でシェベレク顧問がロシア側を代表してスピーチされた。

プチャーチン行列ではロシアの方3名が今年新たにロシア側から沼津市へ寄贈された当時の制服を再現した新たな衣装をまとめて行列された。また、塩衣式終了後恒例の戸田港周回クルージングが実施され、参加者が2隻の船に分乗して、

船上から岸辺の戸田の住民の方々に餅を投げる恒例の餅投げの儀式が行われた。

夕刻水口氏の戸田館にて懇親会が開催され、ロシア通商代表部5名が参加され、当協会及び戸田日露交流協会との友好の絆を深めた。戸田館屋上より戸田港内で打ち上げられる絶景の花火を鑑賞して散会となつた。

毎年開催される楽しい催しですので、会員の皆様に是非参加をお勧めします。（専務理事）

お願い

NPO日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシアに関する講演会、在ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けております。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をよろしくお願い申しあげます。一口千円から、いくらでも結構です。

振込先：郵便口座 00160-9-66486 加入者名：日口交流協会
連絡先：日口交流協会事務局 E-Mail:nichiro@nichiro.org



第2回イワン・クパーラ祭

千葉 麻里

7月22日（土）午後2時前から昨年と同じく水戸浜海岸でスラブの夏至祭り「イワン・クパーラ」の2回目を実施しました。三々五々、車や電車で集まったメンバーを見ると、昨年も参加したリピーターが多かったようです。

子どもも来て海に浸かったり砂浜で大騒ぎ。強い日差しを避けてテントの下でしばらく涼んでいたら、近くの漁師さんたちが捕ったばかりの新鮮な海の幸が運ばれてきてバーベキューが始まります。貝もとうもろこしなどの野菜も炭火でおさら美味しく焼け、大皿いっぱいの大きな魚もすぐに骨だけになってしまいました。

参加者は18名で、会員と一般の方と丁度半々くらいでした。よく晴れた暑い日でしたが、懐かしいアイスキヤンデーを買ったり、海水に足を浸すと風が涼しく感じられました。自然の中でゆったりとした豊かな時間が過ぎていく…。ロシアの人たちが好きな光景だろうと思います。今年は風邪などで来る予定のロシア人メンバーが減ってしまいましたが、昨年のことを覚えていてしきりに残念がっていました。

バーベキューのあとでは、近くの洞窟を探検。石の壁をくり抜いてできた窓から顔を出したところを写真に。

この祭りでは、本来は大きな藁の人形を焚き火で焼くので



ですが、防災上それはできないので小さな火の回りに集りました。頭に花輪をつけ、一人、あるいは二人で火を飛び越えるのもこの祭りの決まりごとです。その後、花輪は海へ流します。

あたりが真っ暗になるまで火の周りで話し込んでいました。ここは奇跡のように人が少なくて静かで、日によって富士山の姿が大きく見えるのでお勧めの穴場と言えます。来年はもっとロシアの友人たちに声をかけて、賑やかに楽しんでもらいたいと思っています。

(常任理事)

明治末年の「ロシャパン」の呼び売り

倉田 有佳

「明治42年 ロシャパン（大型黒パン）の呼び売りが東京市中の評判となる」（『パンの明治100年史』）。どんな人が黒パンを買ったのか気になるところだが、権太庁通訳官秋本（秋元とも）義親が明治42（1909）年11月から実施した結果をまとめた「残留露国人調査」によると、ニコライ・ゼレーフ（43才）は仲間と3人で東京に行き、製パンと行商に従事し、その後神戸でロシア式のパン焼窯を作り、「露式」パンの行商を9カ月余り行った。東京では、一日に1,500個を売り尽すこともあるほど商売はうまくいっていた。しかし、雇主の日本人が契約を履行することは稀で、約束した報酬も与えないため、債権を放棄して再び島（南権太）に戻って来ていた。

現代の外国人労働者への不当な扱いを思わせるような話だが、ゼレーフによれば、東京でパン行商を行う残留ロシア人は他にもいたが、在京ロシア大使館は無関心で、擁護してくれるとはなかったというため、泣き寝入りするしかなかつたのだろう。

明治41（1908）年、東京のパン屋は364ヶ所あり、うち4軒が食パン業、残りは菓子パン屋だった（『パンの明治100年史』）。「パン」人気にはやかり、一儲けしようと考えた日本人がいたとしても不思議ではない。現に、露式パン製造と販売（行商）人を求めて、東京から北海道に向かった高橋安太郎なども、本業は「鞆商」、資金提供者は別にいた。高橋が札幌のパン屋で雇われていた二人のロシア人と雇用契約し、連れて帰京したのが明治41年3月28日のことだった。

ところが、その1年後、売り上げの良い売り子への嫉妬から、もう一人の売り子が殺人を起こす。事業主は、一度に二人の雇人を失う痛手も大きかっただろうが、二人が「権太の

流刑囚徒」、しかも殺人犯だったことを知り驚愕した。札幌で見つけてきたため、素性を知らずに雇ったのだろう。そして事件は複数の新聞が詳しく取り上げたため（明治42年4月14日『東京朝日新聞』ほか）、「ロシャパン」そのものの評判を落とすことにもなったはずだ。

・もっとも、「パンも近頃は余り儲からぬ相なり」と明治42年8月24日『東京朝日新聞』が報じるように、箱車でのパンの呼び売り自体の人気にも陰りが出ていた。「ロシャパン」とて、ロシア人や従軍看護婦スタイルの呼び売りで人目を惹いたのだろうが、その人気は一過性のものだった可能性が高い。食用パンが庶民に浸透するのは、もう少し先のことだ。（ロシア極東連邦総合大学函館校准教授）



日露戦争のことでもあり、従軍看護婦スタイルもあり、下は足袋に草履で、えびすか大黒の顔を付けた箱車を引きながら、「パン、パン、ロシャパン」という呼び声で売り歩いた（昭和52年2月6日『読売新聞』）

モスクワ「ムゼイ」巡り・その7

1912年祖国戦争博物館 Музей Отечественной войны 1812 г.

大矢 温

ソ連時代、11月7日（旧暦の10月25日）は大十月社会主义革命の日であった。武装蜂起したボリシェヴィキがソヴィエト権力の樹立を宣言したという、社会主义ソ連としてはとても大切な記念日だった。ところがこの記念日、1991年のソ連崩壊後は一部の保守派をのぞけば全く顧みられることがなくなってしまった（代わりに11月4日に「国民統一の日」が制定された）。今年、2017年は革命100周年に当たるが、別段、革命的な行事の予定もなく、例年のごとくスルーされてしまいそうな雲行きだ。

これと同じようなことが革命の5年前、1912年にも起きた。1912年といえば、対ナポレオン戦争（ロシアでは「祖国戦争」と呼ばれる）戦勝100周年の記念すべき年のはずだった。この戦勝は、ナポレオンに率いられた60万のフランス軍をロシア軍が撃退した歴史的大事件である。文豪トルストイの長編小説「戦争と平和」の題材にもなった、ロシア人にとっては忘ることのできない爱国的な事件でもある。当然、それを記念した博物館を設立しようという計画が持ち上がった。ところがなぜか、この計画は立ち消えになる。戦争や革命が迫っていたからだ、という説もあるが、真相は不明だ。

さて、時は流れてそれからさらに100年後の2012年に向けて再び博物館を建設しようという計画が持ち上がった。場所は赤の広場の入り口、ソ連時代にはレーニン博物館

だった建物と決まった。19世紀のロシアゴチック形式、赤煉瓦造りの、もともとは帝政ロシア時代のモスクワ市議会の建物だ。外装はそのままに、内部はすっかり改装されて現代的な博物館に変身した。マルチメディアを多用した戦争の解説や、露仏両軍の当時の装備や兵器など見所も多い。特に「敗走するナポレオンが使用した馬車」は一見の価値がある。

場所も便利なところだし、早足で回れば1時間程度で見られるので、モスクワ観光の際にお勧めしたい博物館である。場所は Площадь Революции д.2/3

(<https://goo.gl/maps/WFu8MvZe81H2>) 火曜休館。入場料は大人400ルーブリ

（札幌大学地域共創学群教授）



1100万人以上が「モスクワの日」のイベントに参加した

アンナ・オラーロワ

9月9日にモスクワの空に「都市の日」又は「モスクワの日」という祭日にちなみ「870」というピカピカしている数字が現れた。この数字はモスクワ市の歴史的年齢を表している。

モスクワは始めて文献上にモスクワ川にあった小さな村として1147年に記録され、今年設立870年の誕生日を迎えた。

「モスクワの日」という祭日は9月9日と10日、二日連続で祝い、9日の夜空の花火は一番中心的なイベントといつてもかまわない。午後10時頃ロシアの通りに50万人ほどの人々が花火を見に出た。高層ビルの上の階に住むモスクワっ子がアパートの窓やバルコニーから花火を楽しむことが出来た。もちろん、現在1200万人の人口を誇るモスクワの住民達が花火をテレビの生中継でも見られる。

この祭日はモスクワ市の一一番大きな祭日の一つである。祭日にちなんで、モスクワの通りと広場がとても綺麗になり、都市の雰囲気が変わる。建物の壁と屋根がロシアの旗と風船玉に飾られる。公園と町の広場に無料で音楽コンサートやスポーツイベント、モスクワ史に関する講義やマスタークラスが行われる。モスクワの80の博物館も無料で訪ねることが出来る。私は5歳の娘を連れて子供達が好きな国立ダーウィン博物館に行って、入り口の前に作られた実物大の恐竜の展示会を観た。

赤の広場で行われた「モスクワの日」の開会式にプーチン大統領が参加し、演説の中でモスクワを世界の近代的なメガ

ロポリスの一つと呼び、モスクワ市政が行っている都市の再建を高く評価した。

モスクワの再建の中で「ザリヤーデエ」公園が注目を浴びている。クレムリンから徒歩5分にある新しい公園だ。以前のホテル・ロシアの場所に作られ、モスクワの日に公園の開会式が行われた。「ザリヤーデエ」公園は70年ぶりにモスクワ中心部に立てられた公園である。

10ヘクタールの広さを誇る公園は混交林である。北の地方のランドスケープ、ステップと草地であるロシアの主な四つの気候帯に分けられ、気候帯ごとにその独特な植物が植えられる予定だ。

公園の一つの見所は新しい「フィルハーモニー・ホール」の建物だ。ガラスの屋根の下に温室を作る予定で、コンサートホールの音響設計のテストが今、日本の音響設計家である豊田 泰久と株式会社永田音響設計により行われている。

「モスクワの日」のイベントに参加するモスクワ市民達とお客様の人数が毎年増え、2017年に1100万人の人数に達成した。



● 広報部宛、ご投稿、ご意見をお待ちしております